

多人数参加者による会話の管理

：フロア・スライディングにおけるトピックの交渉と参加者枠組み

永山友子

1. 本研究の目的

本研究は、親戚が集まったお盆の夜の多人数会話を分析して、多人数の参加者により、会話がどのように管理され、進行していくのかを、「フロア・スライディング」という概念を使って分析する。分析に際しては、会話の流れを、何らかの分析単位へと区切って分析することはできないという立場に立つ。会話の分析を単位の分析にしてしまうと、もともと会話がもっている流動性や偶発性を見逃してしまうからである。

よって、本研究は、「フロア」(cf. Hayashi, 1996; Iwasaki, 1997)という概念を導入する。「フロア」は、トピックと会話参加者の参加者枠組みが会話者間で交渉されて構築される会話の場である。そして、「フロア」は、一つの「フロア」から次の「フロア」へと、徐々にスライドしていく。

以下、「フロア」がスライドするという「フロア・スライディング」が起きるきっかけとして、「離れたテキスト」(＝会話の現場からは、時間的に離れたところで創られたテキスト)(Becker, 1995)や会話の場面にあったモノが、コンテキストとして大きな役割を果たし、参加者枠組みの変化(自分が、現場のフロアにおける話し手であり続けることを表示する行動としての「フロア視線」(皆川, 1993)(＝誰にも視線を向けないことで、誰にもターンを与えないようにする))が、「フロア」をスライドさせるもう一つの大きな要素であったことを、例を引きながら検証する。

2. 本研究で用いる用語

2.1. テキスト

本研究は、「テキスト」を、言語使用の結果としてのプロダクトと定義する。従って、テキストは指示的な意味を持たない間投詞一語である場合もあるし、電話での長話である場合もある(cf. 橋内, 1999)。

2.2. コンテキスト

「コンテキスト」とは何を指すのかという問題に突き当たるとき、研究者の考えは、「コンテキスト」が進行中の会話のプロセスの中にあるのか(endogenous context)、それとも外にあるのか(exogenous context)という2つの主張に大きく分かれる。

Gumperz(1982)に代表されるインターアクションの社会言語学(interactional sociolinguistics)という談話分析の方法論では、会話者がもっているとされる社会文化的な

知識が、現実に行進中の会話における発話の解釈に役立つとしている。「会話者間で発話が連鎖されるたびに、織りなされていくコンテキスト(endogenous context)」だけではなく、「社会一般の営みの過程で生み出されているコンテキスト(exogenous context)」の重要性にも着目している。言い換えると、この方法論は、進行中の会話のプロセスの中にあるコンテキストも、外にあるコンテキストも、両方ともに「コンテキスト」として捉えていこうという姿勢をとっている。

本研究は、このようなインターアクションの社会言語学の考え方にに基づき、「コンテキスト」は、「会話者間で発話が連鎖されるたびに、織りなされていくコンテキスト」と「社会一般の営みの過程で生み出されているコンテキスト」の両方を含むという立場を取る。

2.3. 「離れたテキスト」(Becker, 1995)

文化人類学の研究である Becker(1995)は、コンテキストには、以下に挙げる 5 つの種類があると述べている。

1. 対人間の関係(interpersonal relations)
2. 指示的な関係(referential relations)
3. テキスト間の関係(intertextual relations)
4. テキスト内での関係(intratextual relations)
5. 異なるメディアにまたがる関係(intermedial relations)

言語は、再帰的(reflexive)であるとする議論がある(Lucy, 1993)。言語(テキスト)は、その言語(テキスト)が指し示す意味の解釈に役立つようなコンテキストを自ら呼び起こす(context-invoking text)という考えである。中でも、Becker(1995)が、特に注目しているのは、“distant text”(「離れたテキスト」、筆者訳)と彼が呼んでいるテキストである。「離れたテキスト」とは、会話の現場からは、時間的に離れたところで創られたテキストを指している。この「離れたテキスト」と現在進行中のテキストとの間のつながり、すなわち、3 番目に挙げられているテキスト間の関係(intertextual relations)が、一種のコンテキストになりうるのである(Becker, 1995)。例えば、現在進行中の話との関連で、話し手がちょっと前に他の誰かとした話を思い出し、その話を相手に対して始めるという場合、現在進行中の話と「ちょっと前の話」との間のテキスト間の関係が、新しく創られていくテキストのコンテキストになる。このようなときの「ちょっと前の話」が、「離れたテキスト」である。

先に挙げた Gumperz(1982)にも、“contextualization cue”(「コンテキスト化のキュー」、筆者訳)というカテゴリーが見られる。「離れたテキスト」と同じように、コンテキスト化のキューも、再帰的である。コンテキスト化のキューは、会話者が行おうとしているインターアクションについて、どのような解釈が適切であるのかを他の会話者に示しているキューである。キューを受け取った側は、会話の進み具合や、会話の背景にあるコンテキストなどを参考にして、発話を話し手の意図通りに解釈するように期待される。

2.4. 「フロア」

Edelsky(1981)、及び Erickson(1982)、Shultz, et al. (1982)により、「フロア」は、「ターン」

(=話順)と区別され、ターンよりも大きな概念として、会話者による会話の進み具合の認識と関連付けられて言及されるようになった。Hayashi(1996)、及び Iwasaki(1997)は、認知のネットワーク(cognitive network)として「フロア」を捉えて論じている。Hayashi(1996: 32)は、「フロア」とは、「会話参加者を社会的に、心理的につないでいくダイナミックで認知的なもの(dynamic cognitive entity)」(筆者訳)と述べている。Iwasaki(1997)は、「フロア」を、ユニット・フロア(unit-floor)とコンセプチュアル・フロア(conceptual-floor)の2種類に分けた。前者は、実際の会話において観察された話のまとまりを指す。後者は、話のまとまりを手がかりとして把握される、会話者間の認知のネットワークである。

本研究は、Iwasaki(1997)に従い、「ユニット・フロア」(以下、「フロア」)を分析の対象とする。けれども、従来の考え方と異なり、会話の流れを何らかの単位へと区切ることは出来ないという立場に立つ。「フロア」は、一つのフロアから次のフロアへと、徐々にスライドしていくものと想定する。

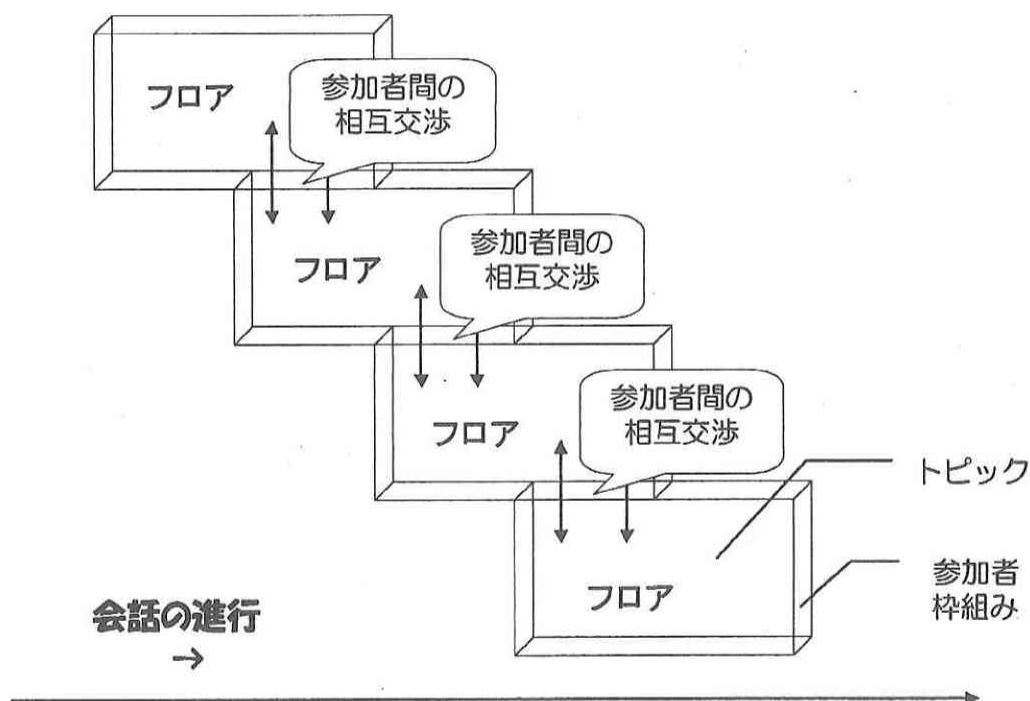


図 1 フロア・スライディング(floor-sliding)のモデル

「フロア」は、トピックと会話参加者の参加者枠組みという2つの要因からなる。トピックが変わらなくても、参加者枠組みが変化すれば、「フロア」はスライドする。逆に、参加者枠組みが変わらなくても、トピックがシフトすれば、「フロア」はスライドする。

3. 会話資料

分析するデータは、お盆の最終日に行われる送り火のときの親族の集まりという場における会話である。この集まりは、山田家¹では毎年毎年行われている。筆者による録画・録音は、1999年8月15日の午後8時半から10時頃までに行われた。横浜市上和泉の旧家である山田家で、夏のお盆の送り火をするために、祖父母から孫までの3世代が集まって、送り火の時間になるまで歓談している。参加者は、お祖母さん、長男（慎太郎）と礼子の夫婦、次男（裕次郎）と遙の夫婦、慎太郎と礼子の長男である勇介、裕次郎と遙の子どもである大策（長男）と光太郎（次男）の兄弟と筆者の9名であった。但し、光太郎は、見たいテレビ番組があるからといって、話の途中で他の部屋へ行ったり来たりしていた。大策も、途中で友だちからの電話に出た後に、自分の部屋に戻った。なお、会話資料の文字化については、概ねザトラウスキー(1993)に従った。発話の左寄りに記した発話番号は、時系列に沿っている。発話が重なっているところにはダブルスラッシュ（//）を、前の発話の後に間髪を入れずに次の発話を続けている場合には、イコール記号（=）を付した。また、フロアをスライドさせるきっかけとなった発話には、二重線を引いた。参加者が、現在進行中のフロアから離れて、新しいフロアを創ろうとしている発話には、波線の下線を引いた。

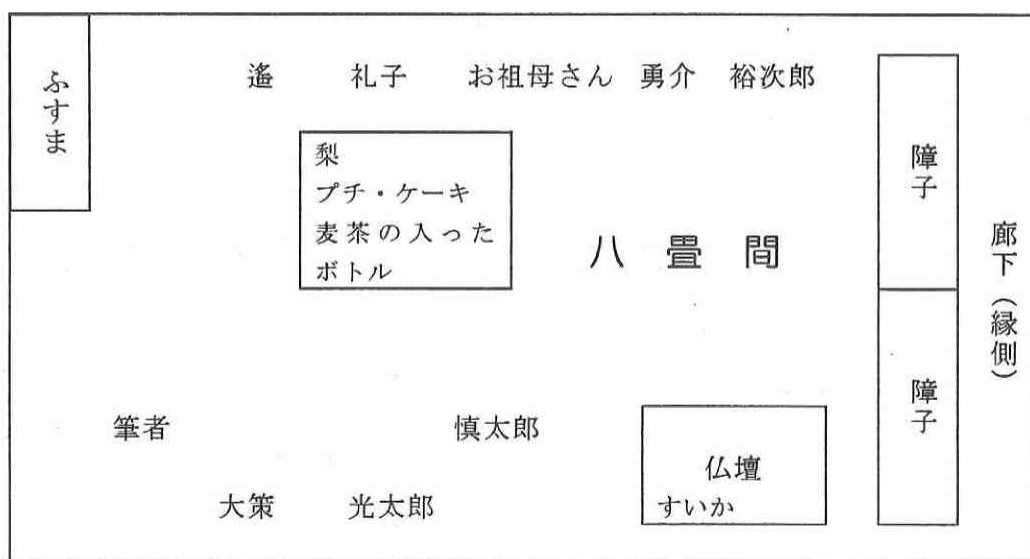


図2 集まりの時に、参加者が座っていた位置

以下の図3に山田家の家族構成を示した。今回分析対象とした会話に参加していなかった人物3名（お祖父さん、故人でありお祖父さんの兄に当たるお祖母さんの前夫、慎太郎

と礼子の次男である拓也)には、網掛けを施してある。

慎太郎は山田家の長男であるが、お祖母さんと亡くなった人との間にできた子どもであるということで、(お祖母さんによれば)「分家」して近所の家に住んでいる。山田家の跡取りは、次男である裕次郎ということで、裕次郎一家がお祖父さん・お祖母さんと二世帯同居している。

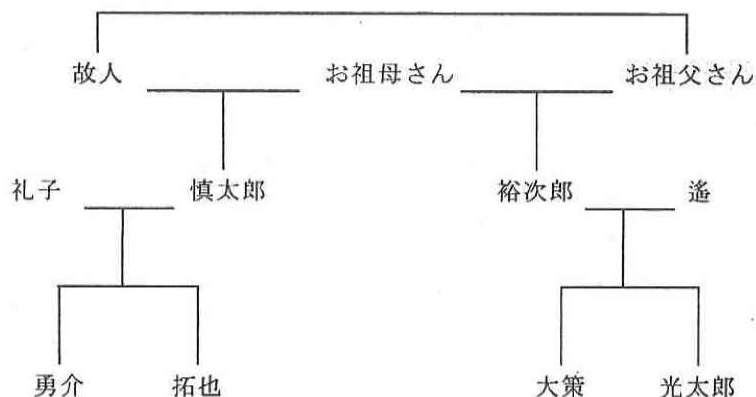


図 3 山田家の家族構成 (今回の会話に参加していなかった人物には、網掛けをした)

4. 分析

4.1. フロア・スライディング(floor-sliding)

4.1.1. 離れたテキスト(distant text)

Becker(1995)は、“distant text”という用語を用いて、会話の現場から時間的に離れたところで産出されたテキストに言及している。このような「離れたテキスト」(筆者訳)は、現場で進行中の会話のコンテキストとして機能することがある。

【例1】では、離れたテキストとして、会話資料を収集した前日に起きた水難事故があった。神奈川県山岳地帯にある道志川(どうしがわ)と玄倉川(くろくらがわ)の浅瀬でキャンプをしていた人達が、大雨に伴う増水による水難事故に遭って死傷者が出ていた。慎太郎が、沈黙の後にトピックをシフトさせて、その水難事故の話を始めている(1729 慎太郎)。

【例1】

- 1721 礼子 : な、なかたにとか、なかやなんとかっていうソニーの、取締役っ
かなんかで、民間で一、国立の教授をやっちゃいけないとかって
新聞でやってた、辞めた人いたじゃん。
- 1722 慎太郎 : ふふう？
- 1723 礼子 : こないだ新聞載ってたよあれ筑波じゃなかったっけ。
- 1724 (沈黙)
- 1725 礼子 : ど、うちちょっと、
- 1726 お祖母さん : 貸して。(慎太郎からストロー付きの水筒を受け取る)
- 1727 お祖母さん : はい？(勇介に水筒を渡しながら))
- 1728 (沈黙)
- 1729 慎太郎 : 大変なことになっちゃった、水でな、(下を向いて氷が溶けた水
を自分のコップに入れながら)
- 1730 礼子 : うーん。
- 1731 お祖母さん : あー、
- 1732 慎太郎 : 道志川、な一。
- 1733 お祖母さん : んでも、何回も、
- 1734 慎太郎 : ん一。
- 1735 お祖母さん : 注意されたらしいのにね。
- 1736 慎太郎 : そうなんですよ。ん一、結局言うくらいしかなかったんだろ？
- 1737 裕次郎 : 無視しちゃったんですよ。
- 1738 慎太郎 : ん一。
- 1739 礼子 : 無視しちゃったからいけなかったんですよ？(裕次郎のいる方向
へ上半身を傾けながら)
- 1740 お祖母さん : そんな感じね。
- 1741 慎太郎 : そうだよな一。
- 1742 (沈黙)
- 1743 慎太郎 : ま困っちゃうわな。[慎太郎が自分の目の下の曇を見つめながら]
- 1744 裕次郎 : あれでも責任取れないでしょ誰にも。管理責任とかそういうのは
もう一回やってるんだから注意してるんだから。

【例1】では、沈黙(1728)の後に慎太郎が、「大変なことになっちゃった、水でな」(1729 慎太郎)と言い出して、水難事故の話へとトピックをシフトさせ、続く礼子(1730)、お祖母さん(1731)もトピックのシフトを受け入れたことで、フロアがスライドしている。更に、慎太郎は、「道志川、な一。」(1732 慎太郎)と言い、水難事故の具体的な例を挙げている。1729 慎太郎では、慎太郎が自分の目の下の曇を見続けており、自分がここのフロアにおける話し手であり続けることを表示する行動としての「フロア視線」(皆川、1993)が観察された。「フロア視線」は、「誰か一人を見つめるというのではなく、中空を凝視しているような視線であり、「全員に向けて話しかけているということを示す工夫として、どの特定の一人にも視線を集中させないようにする。」(皆川、1993)【例1】の慎太郎(1729 慎太郎)も、誰にも視線を向けないことで、次のターンを取る話者を指定することなく、自分の話を続けることになっていた。その後、また話が途切れて沈黙(1742)が起きるのであるが、沈黙を破って話を始めているのは、再び慎太郎であった(1743 慎太郎「ま困っちゃうわな。」)。ここでも、慎太郎のフロア視線が観察された。

同じく、【例2】では、離れたテキストとして、会話資料を収集した1ヶ月ぐらい前に、お祖母さんの妹に当たる中村のおばさんが心不全で急逝したことが、コンテキストとして機能していた。食べ物として遙が台所から持ってきた梨を、みんなで食べている場面のフ

ロアである。

【例 2】

- 1141 お祖母さん : じゃ一つ、
1142 慎太郎 : うまい、
1143 お祖母さん : ん。
1144 礼子 : これおいしかったよ、今年のねえ。
1145 慎太郎 : あ、うまい。
1146 礼子 : うーん。
1147 遥 : 私ねあそこに、なしーの知り合いがいるんだよね。松田高校の前に。
1148 礼子 : 館山さんとか。
1149 遥 : うん、良夫さん。うん、もうすごく懇意にしてるの。行くとねただにしてくれたりとかね負けてくれたりとか。
1150 礼子 : / / ふーん。
1151 お祖母さん : あ、そうそそれで、慎太郎にききておきたかった、
1152 遥 : 食べないんですか、梨も（つと）。
1153 お祖母さん : 22日にね、
1154 お祖母さん : 中村のおばさんのね？
1155 慎太郎 : うーん。
1156 お祖母さん : 埋葬するって言うの。
1157 慎太郎 : ああこないだ言ってたね。
1158 お祖母さん : うん。
1159 慎太郎 : うん。
1160 お祖母さん : それで、遥さんがね連れてってあげる、って言われたんだけどね、
1161 慎太郎 : うん、
1162 遥 : 車がない。
1163 お祖母さん : //車がね、裕次郎が、出勤で使わなきゃならないんだって。
1164 慎太郎 : うん。
1165 お祖母さん : だから、あんたに中村まで、
1166 慎太郎 : =22にち？う、何曜日？

【例 2】では、みんなで梨を食べているという現場の状況がコンテキスト化のキューとなり、最近起きた親戚の不幸へとフロアがスライドしている。お祖母さんの発話（1151 お祖母さん「あ、そうそそれで、慎太郎にききておきたかった、」）という発話が表示しているように、みんなで梨を食べている途中で、お祖母さんが慎太郎に聞いておきたかったことを思い出した。更に、お祖母さんは、「埋葬するって言うの。」（1156 お祖母さん）というメタ言語的発話も行って、離れたテキストに言及している。離れたテキストを思い出して慎太郎に話しかけることで、慎太郎にも離れたテキストを思い出させている（1157 慎太郎「ああこないだ言ってたね。」）。

この場面のフロアでは、1ヶ月前に亡くなった中村のおばさんの埋葬をするということ、その際にお供物として梨を持っていきたいから慎太郎に車で送ってほしいということを、みんなで梨を食べているという現場の状況において、お祖母さんが思い出した。「あ、」（1151 お祖母さん）は、気づきを示すマーカーである。現場的なコンテキストが、時間的に離れたテキストを呼び起こす。そして、呼び起こされた離れたテキストが、今度は現場的なコンテキストとなって、現在進行中のテキストを生み出している。

【例 3】は、一人でゲームに夢中になっている光太郎に対して、お祖母さんが話しかけたところ（656 お祖母さん）から始まっている。

【例3】

- 656 お祖母さん : まーだけど飽きずにそれに、かじりついて、(光太郎に向かって)
 657 慎太郎 : =おもしろいのかそれ、最新のゲーム、
 658 お祖母さん : なんて言うか知らないけど名前なんて言うの？
 659 光太郎 : ポケットステーション、
 660 お祖母さん : ポケットステーション？
 661 光太郎 : 俗にポケステ、
 (略)
 672 礼子 : 中、あもう、もう明日学校行くの？登校日？
 673 光太郎 : え？
 674 礼子 : 明日登校日？
 675 光太郎 : 違うでしょ。
 676 礼子 : 関係ない？
 677 慎太郎 : な登校日なんてねえのか。
 678 礼子 : ないでしょ。
 679 慎太郎 : 昔は十日に一遍ぐらいなあ、
 680 礼子 : あった、
 681 お祖母さん : あったわねえ、小学校だったら、
 682 慎太郎 : =そうだよ。
 683 お祖母さん : 中学は？あった？
 684 慎太郎 : 中学はねえか、中学は、一日あったか一遍ぐらい、
 685 勇介 : そう早く終わらなかった。
 686 光太郎 : 登校日って、学校行って何すんの？
 687 慎太郎 : んな一、先生がさ、
 688 勇介 : 顔見せ、
 689 慎太郎 : みんな元気でやってるかどうかなほら、
 690 礼子 : 宿題もう終わりですか(って)、
 691 お祖母さん : あ、あれ一、なおちゃんかなんか、
 692 慎太郎 : 近況を、
 693 お祖母さん : おんぶして帰ってきたとき、夏休み中じゃなかったの？(裕次郎に
向かって)
 694 裕次郎 : そうそうそう、
 695 慎太郎 : 先生も知りたいだろ、子ども達が、病気になったりさ、
 696 お祖母さん : //だから、登校日ってあったんだよねえ？きつ
と。
 697 光太郎 : うん、
 698 慎太郎 : なんかすると心配だから、みんな元気なそ、それを見せるために、
 699 光太郎 : うん、

中学校に、夏休み中の登校日があるかないかという話をしている過程で、お祖母さんが「離れたテキスト」を思い出し、裕次郎に向かって話しかけている(691 お祖母さん)。裕次郎がまだ子どもの頃の話であるが、裕次郎のいここに当たる「なおちゃん」が山田家に遊びに来ていたとき、途中で「なおちゃん」の脚が痛くなって光太郎が「なおちゃん」をおんぶして帰ってきたことがあった。この場面のフロアでは、夏休みの登校日の話がコンテキストとなり、離れたテキストが呼び起こされて、お祖母さんが昔の「なおちゃん」の話を始めている。「あ、」(691 お祖母さん)も、気づきを示すマーカである。お祖母さんの気づきは、更に裕次郎に向かって話しかけ(693 お祖母さん)、裕次郎の反応(694 裕次郎)を得ることでトピックとなり、この箇所では、お祖母さんと裕次郎との間でフロアが構築されている。けれども、【例2】と違って、【例3】におけるお祖母さんの気づきは、他のみんなを巻き込むフロア・スライディングへと発展することはなかった。お祖母さん

が、再び登校日の話をしているフロアへと戻り (696 お祖母さん)、裕次郎も何の発話も行わなかったため、お祖母さんと裕次郎が創ったフロアは、みんなが登校日の話をしている場面のフロアへと戻っていた。

【例 4】では、慎太郎の発話 2978「今何時なんだい？」をきっかけとして、みんなが時間を確認し、家族全員で集合しようとして、畳の上に置いてある飲食物を片づけようとしている場面のフロアへとスライドしている。2977 遙「うーん。」までのフロアでは、そろばんとコンピュータの話がなされていた。

【例 4】

- 2974 礼子 : だからそろばんの人がいきなり今度これをさ、をさせられたってなかなかさあ、
2975 お祖母さん : 入らないよね、
2976 礼子 : 手が動かないんじゃないやっぱ、そればんでこうやってたのをさ、
2977 遙 : うーん。
2978 慎太郎 : 今何時なんだい？
2979 裕次郎 : ん？もう 10 時になる、
2980 お祖母さん : え？
2981 礼子 : もう 10 時になるよ、
2982 裕次郎 : 10 時になる、
2983 お祖母さん : そんなになる？あ、大変だ、お祖父さんちよっと起き、
2984 遙 : ／／じゃ、おじい、
2985 慎太郎 : じゃあ、ぼちぼち、
2986 お祖母さん : あ、大と光だ、
2987 遙 : ん、今呼んでくる、
2988 お祖母さん : ん、
2989 お祖母さん : お祖父さんちよっと呼んで、
2990 筆者 : あ、ごちそうさまでしたー。(遙がお盆やコップを片づけるのを見ながら)
2991 礼子 : はい、() さまー、
2992 裕次郎 : 眠っちゃったんじゃないの、
2993 お祖母さん : え、寝に行っちゃったかな、

2978 慎太郎「今何時なんだい？」という発話は、表面上全く前後の脈略がないままに行われている。けれども、この発話をきっかけとして、みんなが一斉に話を止めて送り火の準備を始めている。「今何時なんだい？」という発話の働きの説明は、ターンのやり取りや現場のコンテキスト(endogenous context)を分析するだけでは判然としてこない。恐らく、10 時ぐらいになったら、家族全員で送り火をやって解散しようというような打ち合わせが、前々から行われていたのであろう。いずれにしろ、「今何時なんだい？」という発話を適切に解釈するためには、会話の外、つまり、現場で行われている発話の連鎖の外のコンテキストを参照する必要がある。実際、食べ物を片づけた後、送り火が行われてこの集まりは解散となった。慎太郎の発話(2978 慎太郎)に、裕次郎(2979)、礼子(2981)、お祖母さん(2983)、遙(2984)が反応し、慎太郎自身もみんなの反応を受けて (2985 慎太郎)、フロアをスライドさせている。

4.1.2. 会話者を取り巻く「モノ」

会話が行われている物理的な環境も、会話のコンテキストとして機能することがある。

どのような会話も、物理的な環境の中で行われる。けれども、環境として存在するだけでなく、「モノ」が進行中の会話のコンテキストとなっているのなら、コンテキスト化のキューとして、会話者が他の会話者に対して表示しなければならない。

【例 5】では、筆者、慎太郎と遙が、筆者がビデオを使うためのコンセンを探しているところ（発話 76 慎太郎から 79 筆者まで）にお祖母さんが加わり、お祖母さんが八畳間の縁にある廊下の縁（図 1 を参照）に立ったところからフロアがスライドしている。筆者と慎太郎が、コンセンを探している最中で、廊下の縁に立ったお祖母さんが「廊下」に言及すること（82 お祖母さん「廊下張るだけじゃなかった」）により、「廊下」は、進行中の会話のコンテキストとなっている。更に、次の発話で慎太郎が「何、廊下張りたいの、」（83 慎太郎）と言うことで「廊下」の話に応答を行っており、両者の間の交渉によって、「廊下」がフロアのトピックとなっている。

【例 5】

- 76 慎太郎 : な、なんかコンセンがね、
77 遙 : =コンセン、ここにある、
78 慎太郎 : あそっちの方が、
79 筆者 : あ、ほんと？
80 お祖母さん : こっちの方が、近い、
81 筆者 : =ここにあるの？あでも、近い方がいいな一。ちょっと、えーと、どうなるか分かんない。やってみないとね一、お借りします。よいしょ。
82 お祖母さん : 廊下張るだけじゃなかった。（お祖母さんが廊下の縁に立ちながら）
83 慎太郎 : 何、廊下張りたいの、
84 お祖母さん : 張り替えるんじゃないの、
85 筆者 : あ、ここで、
86 お祖母さん : あの一ね、うーん、細い石、
87 慎太郎 : 削ったの？
88 お祖母さん : そうじゃなくて、細い石をね、

次の【例 6】でも、コンセンを探している途中で、慎太郎が「何、削ったのかよ廊下よー」と言って「廊下」を会話のコンテキストとして発話を始めている（255 慎太郎）。慎太郎一家は、お祖母さんや裕次郎一家とは離れて暮らしているため、慎太郎や礼子が、ぴかぴかになっている山田家の廊下を見たのは、このときが始めてであった。

この例では、慎太郎の発話(225 慎太郎)にお祖母さんの発話(226 お祖母さん)が続くが、慎太郎は、「廊下」ということばをキューにして、トピックをシフトさせて自分自身の家の話を始めている（231 慎太郎）。更に、後ろから近づいてきた妻の礼子が、慎太郎が持ち出した「自分自身の家」の話に加わっている（233 礼子）。会話の流れは、お祖母さんと慎太郎がしていた山田家の廊下の話から、慎太郎・礼子夫婦の家の廊下の話へとスライドしている。その後、お祖母さんが山田家自体の廊下の話を数回に渡って、再開しようとした（237 お祖母さん、249 お祖母さん）。しかし、そのとき仏壇に線香を上げていた慎太郎が、仏壇のろうそくの火が消えたことに言及し（250 慎太郎）、その後、ろうそくの火、風、座布団、ろうそくの火、障子、と八畳間にあるモノが次々と言及され、コンテキスト化されている。「常磐のうち」は、お祖母さんの実家である。フロアをスライドさせている発話には二重線を、現在のフロアから離れて新しいフロアを創り始めている発話には、波線を引いた。

【例 6】

- 225 慎太郎 : 何、削ったのかよ廊下よ、
 226 お祖母さん : うあ？そうじゃなくてね、
 227 慎太郎 : もうこんなきれいになったの？
 228 お祖母さん : そうでしょう、あのただ、常磐のうへね？
 229 慎太郎 : うーん、
 230 お祖母さん : うーんと、お正月に行ったときかしら、
 231 慎太郎 : うちだって、やってもらおうか、ニス塗ったのか、
 232 お祖母さん : え？
 233 礼子 : いや、違う、うちにあるの小屋のね、シンナー違う、
 234 慎太郎 : え？
 235 礼子 : シンナー違うもん、
 236 遥 : シンナーなら大丈夫だったでしょ。
 237 お祖母さん : あのね、
 238 礼子 : 木が違う、もうあのうちなんかと。
 239 慎太郎 : いや、平気だよ。
 240 お祖母さん : どうやって、
 241 礼子 : いや、あの違うんならだって、他、
 242 慎太郎 : 松か、
 243 礼子 : うん、柔らかいもん、うちなんかだってほらもう、塗ってある、
 244 お祖母さん : //お宅のは塗ってあるでしょ、もう、
 245 礼子 : 塗ってあるだけで、それはもうでも全部はげちゃった。
 246 勇介 : 塗ってあるって、てめー、で、
 247 裕次郎 : そうなんだ。
 248 勇介 : そ。
 249 お祖母さん : はげちゃったら、塗り直したらいいの、慎ちゃん、あの一、何だっ
 250 慎太郎 : け、これ、松の、(1.0)板でしょ？それでー、
 251 お祖母さん : あ、消えちゃったよ、もう、
 252 慎太郎 : 風が一、あつた、あー、あんたの座布団がなかった。
 253 お祖母さん : いいよいい。
 254 慎太郎 : い、向こうの持ってきて、
 255 お祖母さん : うんうん、
 256 勇介 : えっとそっち側にあるからさ、(1.0)で、この座布団でね、
 257 お祖母さん : また溶けちゃった、火が消えちゃう。
 258 礼子 : 開けないと、やっぱり、(1.0)暑いでしょー？(2.0)風が、来ないと、
 259 お祖母さん : 暑いよ、
 260 礼子 : うん。
 261 筆者 : あ、どうもすいませーん、ちょっと置いといてください、ちょっと、
 (テープレコーダーを気にして)
 262 お祖母さん : あ、そこのほら、障子をちょっと、
 263 慎太郎 : //あ、障子は今そこだけだよな、そこだけに
 して、

【例 6】を見ると、進行中の会話における「モノ」が、次々と言及されて、コンテキスト化されていく過程がよく分かる。

次の【例 7】は、送り火をするときに線香を上げるための火を、丸めてある新聞紙を使って起こす準備が整っているという話がなされている場面のフロアであった。やはり、会話の現場にあった「モノ」が、コンテキストとして機能している。ところが、会話の流れの中で、礼子が「昔そんなもの(＝火を起こしたものの、筆者注)川に流したんだけど、今は川なんか流せないだろうねえ。」(1869 礼子)という発話を行って、その礼子の発話に慎

太郎が応答したところから（1870 慎太郎）、フロアがスライドし始める。向かい合うようにして座っていた礼子と慎太郎が（図2を参照）、お祖母さんの発話から離れて、二人でフロアを削り始める。けれども、お祖母さんは、二人の発話のやり取りに自分の発話を挿入して、自分の話を続けようと試みている。【例7】におけるお祖母さんの発話を観察すると、自分が話したいことをトピックにしようとしても、相手からの何らかの反応がなければ、トピックはトピックとして成立しないことがよく分かる。

村上・熊取谷(1995)は、「トピック」を「話し手と聞き手のやり取りからなる発話のひとつまとまりの中で、言及の対象となっている、ある特定の事柄」と定義している。本研究は、村上・熊取谷(1995)の定義を採り入れる。この定義が特に重要であるのは、トピックは、「話し手と聞き手のやり取り」の中で「言及の対象となっている」という点である。言い換えれば、会話者間の交渉によって、トピックが決まる。話し手だけが聞き手の反応を待つことなく話をしているような場合には、会話のトピックは定まっていな。話し手が話し始めた事柄に対して、聞き手が何らかの応答をしたときに、やり取りのトピックが決まるのである。以下の【例7】では、フロアがスライドしたときの礼子と慎太郎の発話には二重線を、二人のフロアに入り込もうとしているお祖母さんの発話には、波線を引いた。

【例7】

- 1824 お祖母さん : あー足が痛くなった、(座り直しながら)
 1825 遥 : はー。
 1826 礼子 : けー。
 1827 裕次郎 : じいさん出てこないの？
 1828 遥 : お祖父さんはね、
 1829 慎太郎 : =送り火のときには、来るだろ？
 1830 遥 : はい？
 1831 お祖母さん : う、うん。
 1832 慎太郎 : //送るときは。
 1833 お祖母さん : う、うん、送るときは、ちゃんと、
 1834 遥 : はー。
 1835 お祖母さん : 出てくる。
 1836 お祖母さん : もうちゃんと、すっかり用意してあるの。
 1837 裕次郎 : そうそう、早々と。
 (略)
 1864 お祖母さん : 新聞紙が丸めてあるでしょ？(筆者に向かって)
 1865 筆者 : あれ火つけんの？
 1866 お祖母さん : あれ燃やして、(笑いながら)
 1867 筆者 : うん。
 1868 お祖母さん : 線香、つけて、
 1869 礼子 : 昔そんなもの川に流したんだけど、今は川なんか流せないだろうねえ。
 1870 慎太郎 : あーそうだろゴミになっちゃうからなあ。
 1871 礼子 : そんな前だからね、昔、
 1872 お祖母さん : けどね、こないだ、私が朝散歩してたらね、
 1873 礼子 : あでも、やってるよほら、灯籠流しなんてみんなやってるから平気なんじゃない？
 1874 お祖母さん : //あの一、7月の一、
 1875 慎太郎 : あれは回収するんだよまた。
 1876 お祖母さん : お盆を、
 1877 礼子 : え？回収すんのか、
 1878 慎太郎 : うーん。

1879 お祖母さん : あのー、やる人があったのね？
 1880 礼子 : うーん。

礼子と慎太郎が二人で創っていたフロアが、「灯籠を水に流しても、後で回収するからゴミにはならない」ということになり、慎太郎が「うーん。」(1878 慎太郎)と言う。その後、お祖母さんが前の自分の発話「お盆を、」(1876 お祖母さん)に続けて、「あのー、やる人があったのね？」(1879 お祖母さん)と言っている。

このお祖母さんの発話(1879 お祖母さん)は、礼子のバックチャネル(1880 礼子)を得て、再びフロアがスライドし始める(【例8】)。フロアがスライドするきっかけとなった発話には、二重線を引いた。

【例8】

1877 礼子 : え？回収すんのか、
 1878 慎太郎 : うーん。
 1879 お祖母さん : あのー、やる人があったのね？
 1880 礼子 : うーん。
 1881 お祖母さん : そのお祖母さん、もうこんなに早くどっか行ったら、この辺りなん
ですかーって言ったら、いえね、お盆のね、あれ、流しに行っただ
すよおって。
 1882 礼子 : んまあ、
 1883 慎太郎 : 信じねえんだよ。
 1884 礼子 : 起きれもしなかったよ。
 1885 お祖母さん : だから、あのー、町の一中に住んでた人なんじゃないの、こっちへ
引っ越してきてもやっぱりだからそのまんま、
 1886 慎太郎 : // うん、
 1887 礼子 : // うーん、
 1888 礼子 : やってんだよね。
 1889 お祖母さん : 境川に流しに行っただんではないのかね？
 1890 礼子 : はー。
 1891 慎太郎 : ほー。
 1892 お祖母さん : =公団住宅の、

お祖母さんの発話(1879 お祖母さん)は、礼子のバックチャネル(1880 礼子)や慎太郎の応答(1883 慎太郎「信じねえんだよ。」)を得て、参加者枠組みとトピックの両方が変化し、フロアそのものもスライドしている。「境川」は、山田家の近所を流れている小さな川である。お祖母さんの発話(1885 お祖母さん)「だからー、あのー、町の一中に住んでた人なんじゃないの、こっちへ引っ越してきてもやっぱりだからそのまんま、」を、礼子の発話(1888「やってんだよね。」)が、共同構築(co-construct)(Hayashi and Mori, 1998)していることから、お祖母さんが自分の話をトピックとして成立させ、フロア・スライディングを成功させていることが分かる。

5. 終わりに

多人数参加者による会話の管理を分析した結果、参加者の間でさまざまな交渉が行われていることが観察された。そして、交渉の結果として、フロアは徐々にスライドしていくことが分かった。フロア・スライディングを分析していくためには、発話と発話の連鎖を

細かく見ていくことが必要である。けれども、発話の連鎖が織りなしていくコンテキスト(endogenous context)や会話の現場にあった「モノ」などの現場的なコンテキストだけでなく、「離れたテキスト」のようなテキストとテキストの関係(intertextual relations)も、コンテキストとして考察していかなければならない。すべてのテキストは、他のテキストとの関係において初めて意味をなすインターテキスト(intertext)であるという視点(Hanks, 2000)も、今後の談話分析において、さまざまな発見をもたらす可能性がある。

本研究では、フロアをトピックと参加者枠組みという2つの要因の交渉からなる場と定義して、フロア・スライディングという観点から多人数会話を観察してきた。一つの発見は、何らかの形式として分析される傾向にあったコンテキスト化のキューを、コンテキスト化の過程、スライディングの過程として捉え直し、分析していくことの意義である。

今後の課題は、フロアをスライドさせる原因は何か、を探究していくことである。一つの可能性としては、「パワー」という考え方が挙げられる。Fairclough(1995: 1)によれば、「パワー」は、(1)会話における参加者の参加枠組みの不公平さと、(2)ある特定の社会文化的なコンテキストにおいてテキストを形作る能力の不公平さに起因する。

いずれにしても、家族の会話は、コンテキストが多層であるため、テキストの分析も、さまざまな角度から行っていく必要がある。「家族であること」が、家族の会話においてどのように実践されているのかを突きとめていくことが、今後の研究課題である。

注

¹ 以下、本研究で用いられている人名は、すべて仮名である。

参考文献

- Becker, A. L. 1995. *Beyond Translation: Essays toward a Modern Philology* Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Edelsky, C. 1981. "Who's got the floor?" *Language in Society* 10 383-421.
- Erickson, F. 1982. "Money tree, lasagna bush, salt and pepper" In Tannen, D. (Ed.) *Analyzing Discourse: Text and Talk* Georgetown University Round Table in Linguistics Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Fairclough, N. 1995. *Critical Discourse Analysis* London and New York: Longman.
- Gumperz, J. J. 1982. *Discourse Strategies* Cambridge: Cambridge University Press.
- Hanks, W. F. 2000. *Intertexts: Writings on Language, Utterances, and Context* Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc.
- 橋内 武 1999. 『ディスコース 一談話が織りなす世界一』 東京: くろしお出版
- Hayashi, M. and Mori, J. 1998 "Co-constructing in Japanese revisited: We do 'finish each other's sentences'" *Japanese/Korean Linguistics* 7 Stanford: CSLI
- Hayashi, R. 1996. *Cognition, Empathy, and Interaction* Norwood, NJ.: Ablex.
- Iwasaki, S. 1997. "The Northridge earthquake conversations: the floor structure and the 'loop' sequence in Japanese conversation" *Journal of Pragmatics* 28 661-693.
- Lucy, J. A. 1993. *Reflexive Language: Metapragmatics and Reported Speech* Cambridge: Cambridge University Press.

- 皆川満寿美 1993. 「無関与の共同的達成」 『現代社会理論研究』3 47-67.
- 村上 恵・熊取谷哲夫 1995. 「談話トピックの結束性と展開構造」 『表現研究』62 101-111.
- Shultz, J. J., Florio, S. and Erickson, F. 1982. "Where's the floor?: aspects of the cultural organization of social relationships in communication at home and in school" In Gilmore, P. and Glatthorn, A. A. (Eds.) *Children in and out of School* Washington, DC.: Center for Applied Linguistics.
- ザトラウスキー、ポリー 1993. 『日本語の談話の構造分析 —勧誘ストラテジーの分析—』
東京：くろしお出版